

(20) 真米(まごめ)鉱山跡一追記

10年前に本鉱山を訪れていた。その後、本鉱山図を入手することが出来ていたこと、ガーミンによる確かな経路ログの獲得、現状の確認、及び、より安全に坑口跡への経路を見つけること等を目的に再訪した。結果、10年前には急峻な溪谷を十分に注意して渡河して坑口跡に達したが、今回、十分に安全な経路を確認した。

現地は未だにズリは巨大のまま残っており、磁硫鉄鉱、方鉛鉱などの鉱物は豊富である。前回遠方からの確認だけで終わらせてしまっていた鉱山施設跡の広大な原っぱも一部分は歩いてみたが、草木が生い茂っているだけであり、何の施設跡らしい物も確認できなかった。今回の訪問は9月末であり、草木が盛んに生い茂っている時期でもある。落葉した時期にまた訪れるかも知れない。

2020年10月



図1 352号線を西行して来たならば、新田原地区のA点で左折し、鱒沢溪谷林道に入っていく。赤丸の所が鉱山跡である。沢の左岸にはズリ山、坑口跡。右岸の現在広大な平坦林となっている場所には鉱山施設があった。後掲の鉱山図を参照のこと。坑口跡へはB点付近で沢の右岸から左岸に渡る。左岸には沢に沿って坑口跡のズリの箇所まで古い林道が生きている。何カ所かで藪漕ぎになるかもしれないが、広く平坦で真っ直ぐの林道である。B点から坑口跡まで徒歩30分。忠告、赤丸当たりでの谷渡りは、現地で谷を覗けばわかるように危ないので余程の準備がなければ止めよう。なを、右岸の林道は広く平坦であり鉱山跡の先まで不安無く小型車でも上っていける。



図2 図1の部分拡大図。鱒沢には両岸に林道がある。右岸の林道は広く上流まで車通行可能である。A点からB点、B点から右岸更に上流の林道、B点で沢を渡河して左岸の林道を坑口跡までの経路は踏破済みである。が、A'を入口とした左岸の林道はB点付近まで未確認である。視認ではA'から少しは車は入れそうであるが。地形図には見ての通り破線で坑口跡まで林道が記されている。増水などでB点で渡河できない場合には、A'からチャレンジすると良いかも。著者は未踏査であるが。上流部の林道はB点から苦もなく歩いたので、A'までの林道は下流部なのでより歩きやすいかも。

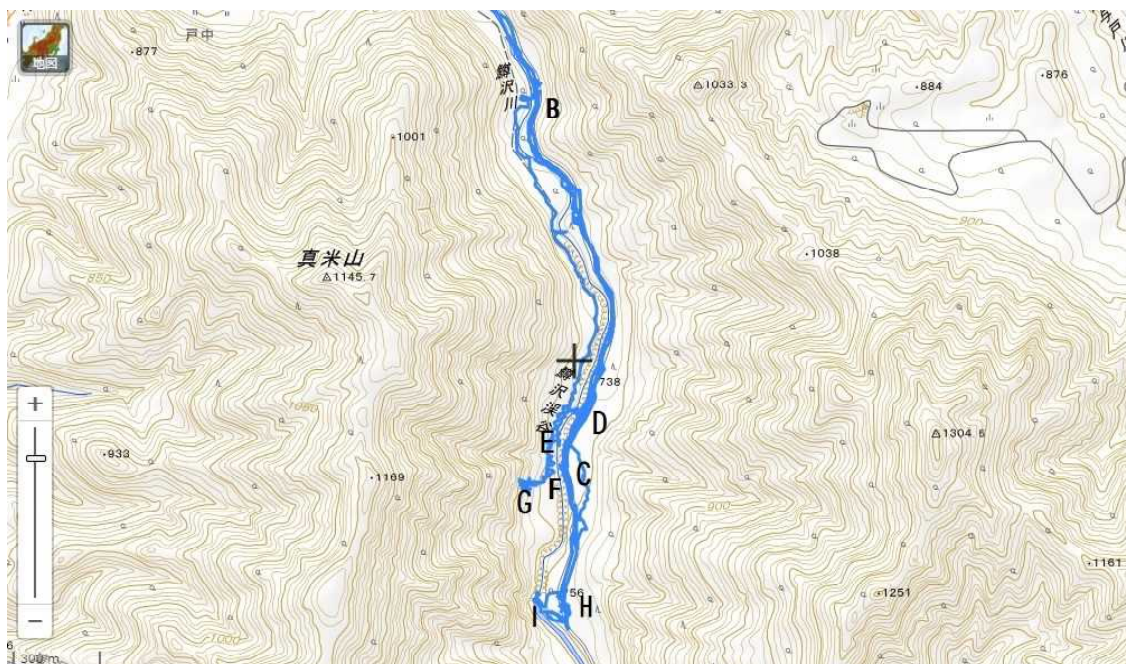
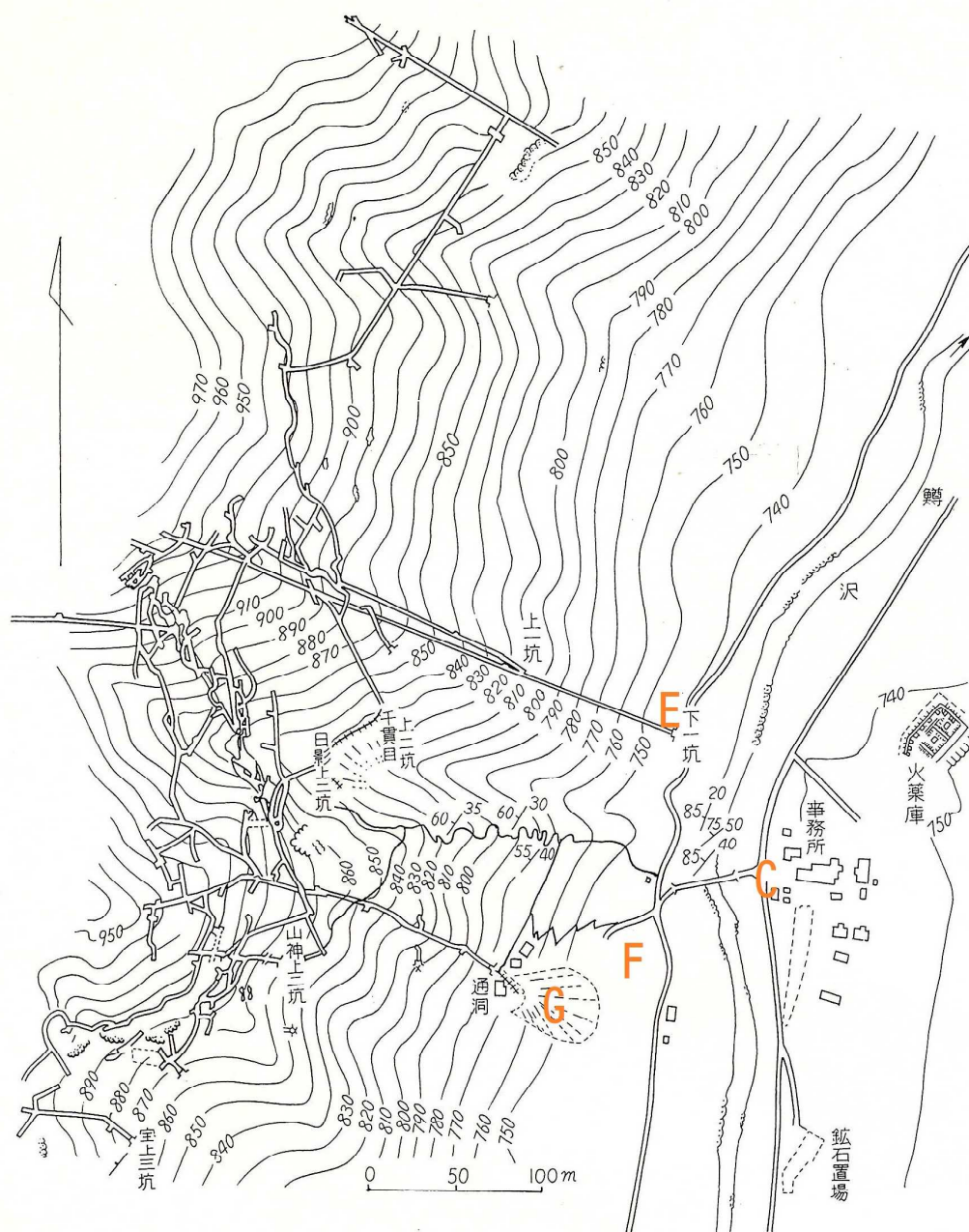


図3 図1の部分拡大図。前回の探査結果を参考にして、鉱山跡より上流にあるI点の砂防ダム付近ならば、左岸に容易に渡れるかもしれないとして、H点まで車で進んだ。が、I点の砂防ダムの突堤に立つと左岸は前も後ろも絶壁であったので、断念。



図4 D点まで戻り、急進な溪谷を渡りきり、E点の所でズリを確認し、そのところに林道を確認した。それを進んで行くとF点で右前方に大きなズリを確認した。G点である。茶色ベタがズリ。ズリに向かって右側からズリを登り上がった。黄緑丸が坑口跡。



第18図 真米鉾山坑内外図

有名であった。明治に入って星繁太氏が鉾業権を得、真米鉾山と称し、後に淡中春子氏を経て昭和13年三菱鉾業(株)により買収され、そのまま放置された。昭和26年

末、只見鉾業(株)により開発され、平均品位Pb 13%, Zn 9%の精鉾を月150t~200t程度出鉾し続け、現在にいたっている。

図5 参考文献(1)より複写掲載。図4と対照して確定した場所印C、E、F、Gを書き入れている。

鉱山跡写真



写真1 352号線を西行して来た。図1のA点である。矢印のように左折し、鱒沢林道に入って南行していく。前方にある橋を渡った先の左に林道がある。A'点である。次回の機会があれば、このA'から進んでみるかもしれない。



写真2 図1、図2のB点である。林道の前方は鉱山跡に続く。鱒沢は「鱒沢渓谷」とも呼称され、兩岸が険しい峡谷である。鉱山跡付近での沢の渡渉は難しい。このB点の所でならば、渡渉は容易である。ズリ、坑口跡に行くには、ここで右岸から左岸に渡ろう。左岸には消えかかっているが沢に沿って平坦で広い林道が残っている。時折藪漕ぎをする必要があるかもしれない。鎌か鋸を持参した方が良い。



写真3 E点の所にあったズリ。左側が沢、右側が山。上部は平坦で林道となっている。鉱石が豊富である。図4の鉱山図と対照すると「下一坑」跡なのかもしれない。山側は結構平らである。坑口跡を探したが確認できず。



写真4 E点から少し進んで行くと、右前方に大きなズリ跡が現れる。このズリ跡は対岸の林道からも良く遠望できる。ズリには磁硫鉄鉱、方鉛鉱などが目につく。ズリは滑りやすい。向かって右側のズリと林の境界部分か、林の中なら登りやすいか。



写真5 ズリを登り上がった。G点である。ズリの頂上から下の方向、F点を見る。



写真6 G点から対岸を遠望する。10年前の既報の写真と対比すると良い。10年前にはズリに気をとられ、右岸の鉱山施設跡を探索していなかった。今になって残念に思っている。



写真7 ズリの頂上から山側を見る。赤輪の奥に坑口がある。



写真8 中央の黒い四角が坑口跡。「通洞」の入口と断定。



写真9 坑口の中を覗く。下に水が溜まっているが、入口付近の土砂を除けば排水が
出来そうである。



写真10 沢の右岸のC点付近である。沢
側の赤輪の林の中に平らなコンクリート基
台があった。



写真11 コンクリートの基台は約5m×
5m。草木に埋もれていたが、少し刈り払
ってのよう。図4に記されている橋の基台
と判断した。とすれば、対岸に同じような
基台があるのかもしれない。が、木々が鬱
蒼と茂っており、対岸はよく見えない。左
岸に渡れば、確認できるかも。次回を期待
しよう。

採集鉱物写真



写真12 採集した標本。磁硫鉄鉱と方鉛鉱の混
在と思う。

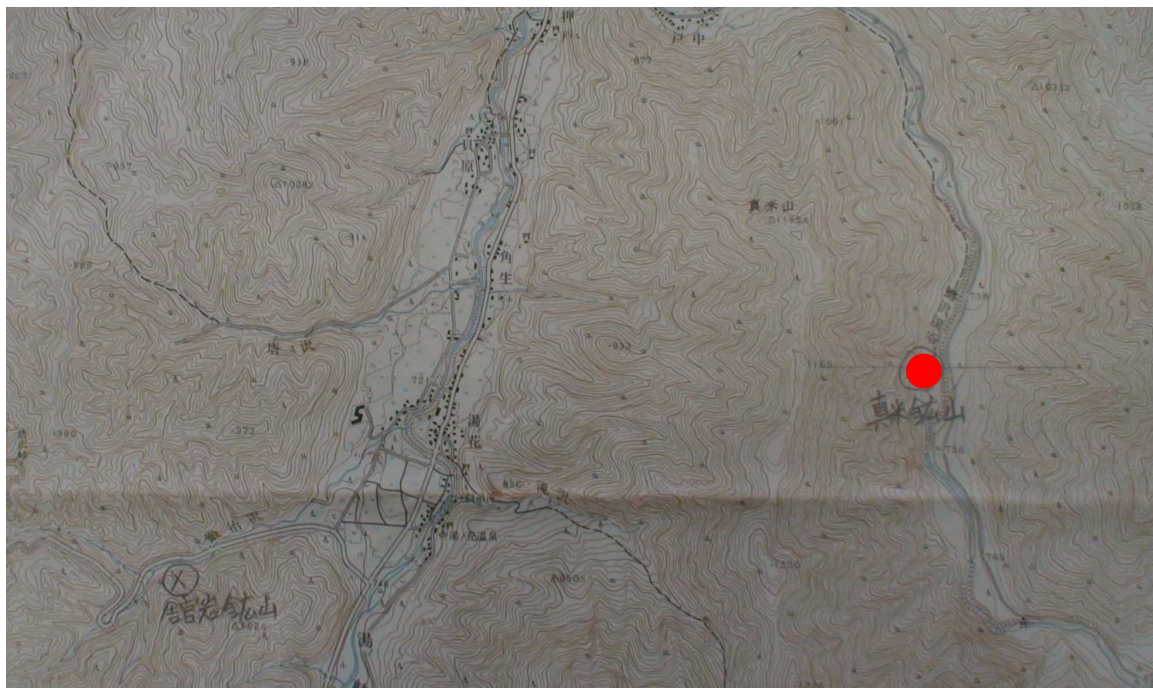
参考文献

- (1)「福島県鉱山誌」、福島県、1964年。

(20) 真米(まごめ)鉾山跡

参考文献(1)を手引きに探査に出かけた。南会津郡舘岩村で、鱒沢溪谷に入っていく。溪谷に沿ってしっかりした林道がある。地形図中の赤丸印の所が、鉾山跡であるが、林道との間は深い溪谷となっている。注意しながら沢底に降りる。が、浅いところはあるのはあるのだが、長靴では水が入ってしまうであろう。最初から裸足となり、ズボンをまくり上げてわたるのがよい。後で気が付いたのであるが、鉾山跡までの林道の途中当りで、砂防ダムがある。この砂防ダムで溪谷の左岸に渡れるのではないかと思う。渡ったなら、地形図中の点線の林道があるので、これに従って、鉾山跡まで行けばよい。或いは、溪谷には右岸と左岸の両方から入れる。前述の林道は右岸の林道である。左岸の林道(地形図中の点線経路)は車が入れない。徒歩で進むこととなる。

ズリでは今でも磁硫鉄鉾や硫砒鉄鉾が採集できる。ここの鉾山は規模が大きかったようである。今回初めての探査であった。機会をつくって、他の場所のズリ跡など再探査を行いたい。



地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図「湯ノ花」

探査日 2009年5月、その他の日

参考文献

(1)「鉾物観察ガイド」、松原 聡編著、東海大学出版会、2008年。

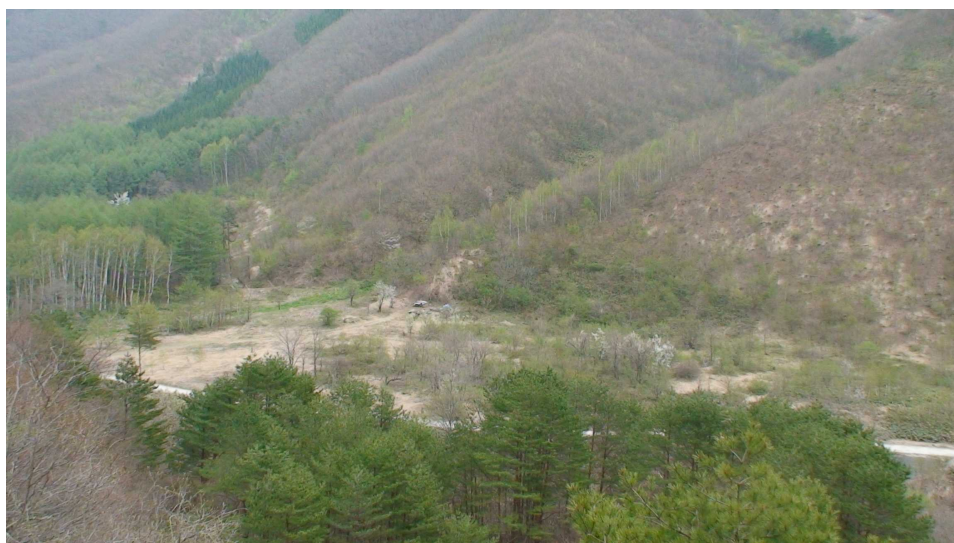
鉦山跡写真



林道から遠望した真米鉦山のズリ跡。林道と鉦山跡の間には深い谷がある。



ズリの下から撮影。ズリの上部の向こうには坑口跡がある。



ズリのでっぺんから、来た林道方向を見る。中央の平坦部分には鉦山施設が建っていたらしい

採集鉱物写真

めぼしい鉱物は採集できなかったのもので未掲載。